

## 言語活動を通じた伝統や文化に関する教育の充実による 言葉への関心を持つ児童の育成

—小学校4年生における学校放送番組「ひょうたんからコトバ」の効果的な活用を通して—

宮崎県都城市立高城小学校 教諭 水野 宗市

souiti@js4.so-net.ne.jp

キーワード：放送教育、4年生、伝統や文化に関する教育、国語科

### 1. はじめに

今回告示された学習指導要領の総則の中には、「生きる力」を育んでいく一つのポイントとして「言語活動の充実」が謳われている。また、国語科改訂の要点の中で目を引くのが「伝統や文化に関する教育の充実」である。これを受け、国語科では、言語の教育としての立場を一層重視し、国語を尊重する態度を育てる必要があり、国際社会の中で活躍する日本人を育成していくために、「我が国の伝統や文化を受け止め、それを継承・発展させるための教育」が、教育現場に求められている。

そのような中、児童たちの口からは「はずい（恥ずかしい）」「めっちゃ〜」「～的には」「やばい」「きもい」など、若者言葉と言われるこれらの言葉が時々聞かれる。これらの言葉は、児童たちの中にも抵抗なく入ってきて、深く考えずに自由に使う面が見られる。逆に、「故事成語」「ことわざ」など、昔から伝わる様々な伝統的な言葉が児童たちの口から出てくることはほとんどない。

その違いについて考えると、若者言葉は、表現の明快さが第一誘因で広がっていくのであろうと思われる。一方、故事成語、ことわざは、「意味が分からない」「日常あまり目にしない」など、強く意識させなければ、児童たちがなかなか関心をもたない状況にある。

### 2. 研究の実際

#### 2.1 「ひょうたんからコトバ」の番組内容分析

NHK教育テレビ学校放送番組「ひょうたんからコトバ」（15分）について、時間ごとの詳細な内容を調べた。（表1参照）本番組は、毎回のテーマに沿った「故事成語」「ことわざ」「短歌・俳句」「日本語いろいろ」の4つのコーナーに分かれて放送されている。そこで今回、番組を15分間通して視聴するのではなく「断断視聴（15分の番組を場面ごとに分けて視聴）」させ、それにより各コーナーごとによりわかりやすく学習に取り組めると判断した。

番組の時間配分は、故事成語に約5分、ことわざに約4分、日本語いろいろに約4分と、この3つを柱として番組が構成されている。また、各コーナーの内容（表1参照）を見ると、アニメーションや有名人による体験談、映像と語り、パントマイム等、興味・関心を高める工夫や児童の意欲を喚起する内容が盛り込まれている。

このように番組分析から、中学年でも理解しながら学習を進めることができると考えた。また、今回の実

践は「故事成語」「ことわざ」「日本語いろいろ」の3つのコーナーを中心に学習を展開することが良いと判断した。

表1 番組の構成分析表

時間	番組の詳細な内容
0'00	今日のテーマについて
0'40	今日の「故事成語」・・・(文字)
0'48	○故事成語の活用場面1(アニメーション)
2'00	○故事成語についての説明(画像と音声)
3'25	○故事成語の意味(文章)
3'40	○故事成語の活用場面2(アニメーション)
4'15	○故事成語を活用した文章の提示
4'25	○故事成語の活用場面3(アニメーション)
5'05	○故事成語を活用した文章の提示
5'35	今日の「ことわざ」・・・(文字)
5'40	○ことわざの説明(画像と文字)
6'00	○ことわざについて有名人の体験談を通じた説明
7'50	○テーマに関する他のことわざの紹介とその活用(画像と文章)
9'00	今日の「俳句・短歌」・・・映像と文章、音声
10'15	今日の「日本語いろいろ」
15'00	○テーマに関する様々な日本語(3~5語)の紹介と活用(映像と文章)

#### 2.2 理解する場と考える場を1単位時間に設定

番組は、映像やアニメーションと文章とを併用することで、「故事成語」や「ことわざ」の意味や使い方をわかりやすく示し、児童の理解を高めている。そこで、「故事成語」や「ことわざ」の視聴は「理解する場」ととらえ、視聴の後に番組を一時停止し、学習した「故事成語」や「ことわざ」を活用した文章を作成するという「考える場」を設定した。この「考える場」を設けることで、ただ番組を視聴するだけではなく、児童が学習するという意識をしっかりと持つことができると考え、学習した言葉の定着にもつながり、ひいては言葉に対する関心をより高めることにつながると考えた。また「俳句・短歌」については、素晴らしい映像と語りを中心に扱われているので、教師側があまり補足せず、感じる場面として活用することとし、「日本語いろいろ」は、毎回様々な言葉が出てくるので、内容に応じて教師側から指示を出し、学習を展開するようにした。毎回の学習は、番組利用という点で、ほぼ同じような形式で繰り返し学習が進められるので、ワークシートを活用し（図1参照）、児童が主体性を持って学習に取り組めるように進行は児童が行うようにして、教師側は「難しい言葉の意味や使い方の補

足」「文章作成において苦手意識を持つ児童への個別指導」「必要と思われる助言」を行うのみとした。

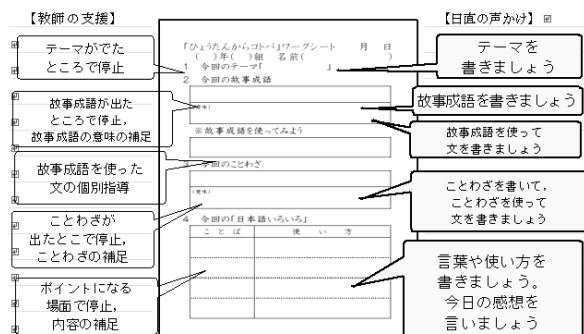


図1 ワークシートを活用した1単位時間の進め方

## 2. 3 学習内容を定着させるための教室環境の工夫

学習した直後は、印象に残り覚えているが、時間がたつにつれて記憶が薄れてくる。特に、故事成語やことわざについては、日常的に活用するものではないので、学習内容を定着する工夫が必要であると考えた。その方法として学習した内容を教室に掲示することとした。

自分たちが意識して覚えるように、番組終了後、グループごとに、学んだ故事成語やことわざをワークシートをもとに、責任を持って記載し、掲示するようにした。これにより休み時間など、掲示してある場所に行き、言葉や意味を覚えようとする児童たちの姿が見られるようになった。

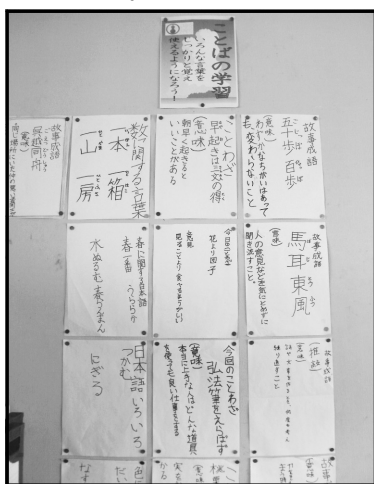


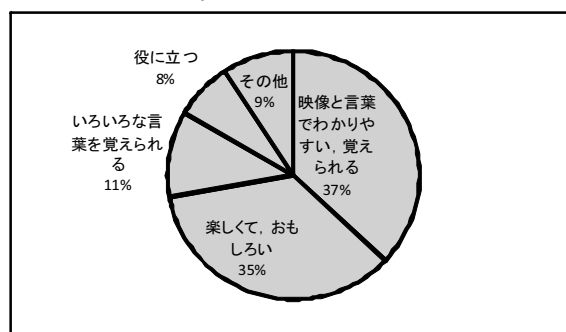
写真1 学習内容の児童手書きの掲示

## 3. 考察

### 3. 1 アンケート結果より

『「ひょうたんからコトバ」の学習は好きですか』という問いに対して、好きと答えた児童は、32名中31人であった。好きな理由（グラフ1参照）として、「映像と言葉でわかりやすく、覚えられる」が37%、「楽しくておもしろい」が35%で、学校放送番組の効果であると考えられる。また「いろいろな言葉が覚えられ」11%、「役に立つ」8%、その他（難し

く習っていない漢字がでて勉強になる、使い方がよくわかる、昔の人の考えがわかる）9%と、言葉の理解向上を理由に挙げているのが全体の4分の1程度であり、それら児童についてより詳しく見ると、普段の国語の学習において理解が高い児童であった。理解度により児童のとらえ方に多少の違いはあるものの、番組視聴による言葉への関心の高まりについては有効であったと考えられる。



グラフ1 番組を好きな理由

### 3. 2 児童の感想より

「ひょうたんからコトバを見て、はじめて故事成語を知りました。すごいなと思いました。故事成語を使って文を書くのはむずかしいけれど慣れてくると少しずつ書けてきたのでうれしかったです。」

「これからも、もっといろいろな言葉を覚えてその言葉をいっぱい使いたいです。日記などで使うのが楽しみになってきました。」

「初めて知った言葉があるとどんな意味か考えてしまいます。意味が覚えられると家に帰ってお母さんに問題を出すこともありました。」

「自分が書いた言葉はしっかりと覚えようと思いました。」

休み時間に、後ろの掲示物を一人で見ている子、数人で話しながら見ている子、時間がたつにつれてそんな姿を見る機会が増えた。感じ方はそれぞれであるが、番組だけでなく、環境の整備や活用の場を工夫したことが、言葉への関心をさらに高めたということ、それぞれの感想から感じる事ができた。

### 3. 3 今後の課題

今回の実践を行い、目標とした「児童の言葉への関心の高まり」を実感している。それと同時に、次のような課題もみえてきた。

- 年間学習指導計画における明確な位置付け
  - 児童の実態を考慮した学年間での繰り返しの指導
  - 学校放送番組活用後における指導の工夫
- 伝統や文化に関する教育の充実は、教師側が意識して実践していかないとなかなか難しいように感じる。今後も学校放送番組のような手軽で効果的に活用できる教材を授業に取り入れながら児童の言葉に対する関心を高め、国際社会で国語を誇りに思える人間を育成していきたい。